

昭和23年 棟方志功

No.90

平成24年7月5日

社団法人日本山岳會富山支部

アサギマダラに誘われて

—旅をするロマンの蝶—

アサギマダラを「ステンドグラスの様な蝶」と書いた人がいるが、まさにチョコレート色に縁取られた中にちりばめた半透明の浅葱（アサギ）色の文様で漂う様は可憐で美しい。学名を *Parantica sita* といい、*sita*（シーター）とはインド神話の農耕の女神で貞淑で美しく理想の女性らしいですからピッタリの学名です。旅をする蝶としても有名だが昨年は日本から放蝶したのが遠く香港で再捕獲が確認された。どこにそんな力を秘めているのか驚きの飛行能力です。どんな方法で太平洋の大海原で自分の渡る方向を決めているのかも不思議です。そして、何のために2000 km以上に及ぶ渡りをしているのか。富山県内では5月下旬には北上して来て里山で目にします。翅はボロボロで南方の島から長旅の末ここまでたどり着いた姿に感動さえ覚えます。梅雨明け頃、羽化した新世代のアサギマダラが現れ始めます。県内では医王山・白木峰・有峰・僧ヶ岳などが捕獲ポイントとして知られていますが、「ねいの里」が主催して始まった調査はまだ10年程です。まだまだ情報不足です。県内の何処かに人知れず乱舞している場所がある気がします。鳥の渡り、魚類の回遊などは調査のため捕まえようとしてもとても困難で研究者が行う分野です。ところがアサギマダラの渡り調査は誰でも簡単に参加出来ます。毎年9月に有峰でジュニアナチュラリストとマーキング活動をしますが、自然の中でみな楽しそうに嬉々として網を振っています。そして、後日マークした蝶が遙か南の地から再捕獲の嬉しい知らせが届きます。子供達には強い印象としての思い出になっているはずですし、謎の渡り解明の為の貴重なデータとして記録されます。

近年私は僧ヶ岳林道でよくマーキングしています。僧ヶ岳は若き頃に登山の洗礼を受けて足繁く通いヒマラヤへもつながった青春の山です。30年余年の年月を経た今、アサギマダラに誘われて再びこの山に戻り通う事になった。蝶は「飛ぶ」より「舞う」とした表現が似合いますがアサギマダラにはピッタリな言葉です。大きく翅を広げ「フワリ、フワリ」と優雅に野山を舞っています。それを見る時「花咲き蝶が舞う」と言う自然豊かな風景に囲まれている安らぎが湧きます。マークした後放蝶すると、上昇気流に乗りどんどん舞い上がり最後は点となり次々と天空に消えていきます。遙か南の島々へのロマンに満ちた旅立ちです。そのアサギマダラを見送りながら少しだけロマンのお裾分けに与っています。



（藤條好夫）

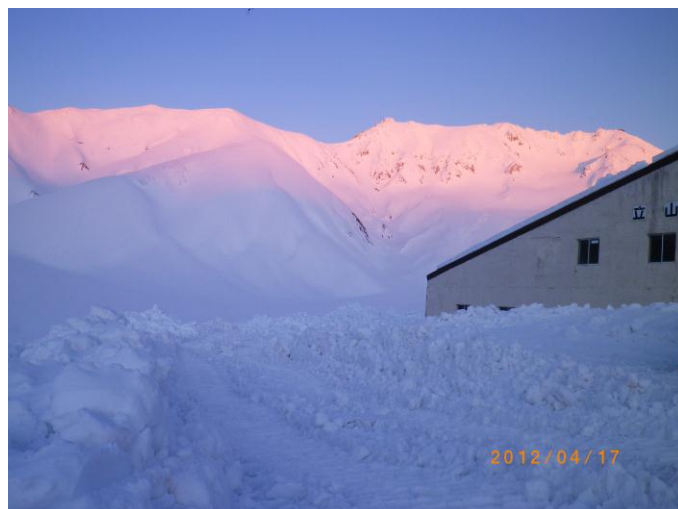
※生き物ふれあい自然塾会報「ふくろう通信」（第25号 H24.3.25）に掲載された文を転載。

立山・春山スキー

今年は 4/17 に立山高原バスが全線開通になった。早速 18 日に山田、金尾両氏と春山スキーに出かけた。私は前日立山に入って雷鳥沢ヒュッテに泊まり、夕方の素晴らしい山焼けを眺め、ヒュッテ内の地獄谷温泉に浸かって至福のひと時を持った。

翌朝室堂で両氏と合流し室堂山を目指す。今日はまさに雲ひとつ無いピーカン、三々五々ボードを背にした若者やスノーシューを履いた登山者がゾロゾロ列をなして室堂山へ向っている。私はシールを持ってこなかったのですキーをリュックにつけ、のろのろ登り 2 時間弱でやっと頂上に到着 (12 時) した。

稜線の向こうに五色ヶ原からその奥に雲の平から槍・穂高連峰など北アルプスの見事なパノラマが展開されていた。ここで大休憩、この景色を充分堪能し、一時お楽しみの大滑降に移る。室堂山から天狗山への斜面は誰も滑っていない、真っ白い山肌に 3 人で思い思いのシュプールを刻みながら天狗山荘方向へと滑り込んだ。昨夜の新雪が 10cm ほど積もっていたが、気温が上がり少々重たくなってきたものの、気持ちの良い滑りができた。山荘から下のダラダラ斜面の雪質は次第に重く右足が疲れてきた頃、美松坂のシラビソの樹林帯に入り、弥陀ヶ原ホテルが真下に見えてきた。1 時ちょっと前、立山荘へ滑り込みコーヒーを 1 杯飲んでバスで下山した。



(当初、美女平まで滑ろうかと云っていたが、登る時ブナ坂や下の小平などの状況を見たらとても滑れるような状態ではなかったのでこれが正解だった。)

(近藤 晋 記)

播隆祭および高頭山記念登山

「第 27 回播隆祭」は 5 月 20 日 (日)、富山市河内の播隆上人顕頌碑前で行われ、支部会員、生家の会の皆さんおよび一般の方も含めて約 40 名が播隆上人の遺徳をしのんだ。

式では先ず山田支部長が参加者へお礼を述べ、またここ数年支部行事で播隆ゆかりの地を訪問したこと、顕頌碑碑文の内容や上人の略年譜についても紹介した。次に全員が碑の前で焼香。最後に生家の会を代表して大作一男さんが「岐阜や愛知県で上人の業績がよく知られているが、生まれた地で式を行うことに意義がある」と挨拶された。この後、懇親会に移り、車座になって賑やかに歓談の時を過ごした。



登山道整備の参加者



記念写真

式後の高頭山登山には、支部会員と一般の方合わせて 11 名が参加した。そこには遠路七尾市から参加された女性の姿もあった。イワカガミやツツジ、ツバキ、シャクナゲなどの花を眺め、またブナなどの木々のみどりも眩い道を 3 時間程歩き、全員が頂上に到着した。

前日、支部の有志により草刈りなど登山道整備が行われており、参加者からは歩きやすかったと感謝の言葉も聞かれた。ボランティアで作業に携わられた皆様にお礼申し上げます。

(播隆祭参加者) 木戸、中島(博)、高塚夫妻、石浦、山田、金尾、本郷、道正、宮崎

(高頭山登山道整備) 中島(博)、山田、有澤、金尾、山岸、本郷、島津

(写真と文；金尾誠一)

五支部合同懇親山行 (福井支部)

—越知山 612.8m 泰澄ウォーカー—

5 月 26 日 (土) ~ 27 日 (日)

参加者：木戸、石浦、近藤、山田、川田、辻、金尾、本郷、山岸

《26 日》木戸自工に 6 人集合出発、小矢部インターにて山田車の 3 人と合流、一路福井に向かう。途中、人形浄瑠璃の曾根崎心中の作者、近松門左衛門の碑に寄り、昼食はやっぱり福井名産お蕎麦です。予定より早く集合宿泊場所《泰澄の杜》に着く。13 時 30 分より泰澄ミニシンポジウムが始まる。総勢 45 名で越知山泰澄塾長の挨拶、泰澄コラム発表では泰澄の足跡に熱い思いの探究発表、ビデオ上映「今甦る伝説の僧・泰澄」、16 時より泰澄大師の開創、後に西の越知山、日野山、文殊山、日野岳、白山等々に登峰され、諸国ご修行して 77 歳で帰山。ご遷化なされた大谷寺に参拝し、住職さんの熱心な説明も聞き、泰澄大師塾に近づいた気分です。18 時より夕食、懇親会。各県支部持参の美味しい地酒を頂き賑やかな宴会でした。



《27日》8時マイクロバスにて小川登山口へ。「第24回越知山泰澄ウォーク&泰澄祭」の横断幕があり、約140名の老若男女と賑わっています。受付入山式を終えJAC五支部は8時50分出発。登り始めはモウソウ竹林の歩きやすい道です。子供達も安全に楽しめます。軽いアップダウンが延々と続き、登山道わきには谷ウツギ、これから色付くコアジサイ、ナルコラン、チゴラン、シライトソウ、ササユリ、キンランと木漏れ日の中で楽しませてくれる。5合目通過後、10時10分休憩し苔むした岩からの冷たい独鈷水を頂く。11時20分越知神社着。全員参拝後泰澄際の歌とアコーディオンの集い、ゲームありと楽しませて貰う。昼食はホテルからのおにぎりだけかと思ったりしたが、大きなお鍋の泰澄鍋が振舞われ美味しかったです。石浦、近藤、金尾班も車で上下山し、泰澄鍋は食べられたそうです。13時30分頂上へ向かって出発、35分着。もと来た道に戻り、展望台、花立峠14時35分、バスが待つ悠久ロマンの杜に15時40分着。泰澄大師修行の道に感謝し、全員お疲れ様でした。泰澄の杜16時10分着。富山支部全員合流して帰路、富山へ。

(山岸和子 記)

追悼登山 (中山 1255.0m 三等三角点)

平成24年6月6日(水)

参加者：木戸、石浦、山田、有沢、近藤、松本、森、金尾夫妻、河村、山岸、本郷、渋谷夫妻

昨年亡くなった支部会員の高柳清美さん(前支部事務局長)と仲俣新一さん(元魚津市立図書館長)の追悼登山を馬場島近くの中山中で開催したところ、平日ではあったが14名の参加があった。予定の8時までに集合場所の中山中登山口に車が集結、この時間まだ劔岳や北方稜線の山並みが望めた。今日は夫婦での参加もあり、紅三点。金尾事務局長を先頭に8時10分に出発。高岡方面の三人が到着しないので有澤・山岸・山田が20分まで待ったあと、山には登らない石浦さんに頼んで後を追った。歩き慣れた登山道だがすぐ汗が噴き出す。杉の巨木のある稜線に着くも休憩なしで頂上に向かう。消え残りの残雪があり、イワウチワの花が咲く。9時43分中山山頂。劔岳の絶好の展望台だが今日は残念ながら何も見えない。少々遅れて高岡組も到着。花を手向け、ろうそくで線香に火をつける。



事務局で作った追悼登山のしおりが配られる。支部長の挨拶のあと、木戸前支部長が高柳さんの思い出や藤平正夫元日本山岳会会長の分骨の話がされた。仲俣さんの娘さんが事務局長と同じ町内に在住で、追悼登山の話が伝えたと所思い出の品と志を持参されたという。お供えの和菓子や羊羹が配られ、木戸さん自家製の梅ワインをいただいた。全員で記念撮影のあと、下りは東小糸谷の周回コースへ。サンカヨウ、エンレイソウやキクザキイチゲ、ニリンソウなどの花を楽しむことができたが山菜は見当たらない。馬場島に着き、皆で石のテーブルを囲む。山岸会員手作りの山菜料理が車から出てくる。ワラビは有澤会員らが魚津の山でとってきたもの。高柳さんが得意だったワラビの昆布締めもあり、追悼登山にふさわしい昼食のひとつときであった。

(山田信明 記)

個人山行「屋久島縦断」4/19～27

私にとって屋久島は13年ぶりの再訪でした。前回は会社勤めをしながら「百名山」を回っていた時であり、二泊三日で慌ただしく宮之浦岳、縄文杉を通り過ぎた感じであった。今回は家内の希望に応えること、自然保護委員会で取り上げられた現状を自分なりに確かめてみることにし、山以外の屋久島も体験する事を目的にし、できるだけゆっくり時間をかけることにして島に向かった。

会社退職以後、お陰様で時間には余裕があるので、JR、フェリー、バス、高速艇を乗り継ぎ二日かかりで宮之浦に入った。登山コースは、楠川歩道～白谷雲水峡～縄文杉～宮之浦岳～尾之間歩道をたどる屋久島縦断の道を選んだ。

入山初日の朝、小雨の中「民宿おふくろ」を出た。バスを降り楠川集落から黙々と高度を稼いだら、白谷雲水峡に着く頃は大粒の雨に打たれるようになった。管理棟で計画書を出す時、「増水しており行動には気を付けて下さい。」と管理官から言われた。特にこのまま水が引かない場合、尾之間歩道の鯛之川の渡渉は無理なので必ず引き返すよう念押しされた。実際、そこから上流の白谷川は暴れる蛇のように凄まじい激流で、支流での渡渉にも苦労させられた。ようやく着いた白谷小屋での泊まりは我々二人だけであった。ラジオを聞いてみると、大雨、強風、洪水、雷、波浪とあらゆる注意報、警報が出ていた。夜中に目を覚まして外を窺ってみると、相変わらず雨が降り続いており小屋の前が濁流になっていた。停滞になることも覚悟して再びシュラフに潜り込んだ。前回来たときは雨に降られなかったので気が付かなかったが、雨の屋久島の怖さは尋常でないと思った。

翌日、幸いに雨は上がり、予定通りのコースを採った。ただし、この日以降何日たっても水量はなかなか衰えず、渡渉場所にかかる度に気を使わせられた。小屋から辻峠に向う間、豊富な苔、多彩な照葉樹、針葉樹が調和した幻想的な情景が眼前にあった。そこは当に屋久島の気候風土が紡いだ代表的な美しい風景の一つであった。楠川分かれからは前回通った道であった。小柄なヤクシカも道案内するようにたびたび現れ、気持ちりが和んだ。また雨も小止みになり、ようやく落ち着いた気分で歩くことができた。

大株歩道の登りの木道歩きになると、道すがら翁杉、ウィルソン株、大王杉などの大木が次々に現れた。やはり名のついた杉は一つ一つそれぞれ立派なもので独特の風格を感じた。縄文杉からの帰りの人たちとも時々すれ違った。降りてくるのは殆どがガイドに案内された人たちであったが、高齢者に交じって若い女性の姿が結構多いようであった。またガイドさんは、老若男女すべてありであった。縄文杉に着いた時は周りに誰もいなくなっており、心行くまで山尾三省さんが名づけた「聖老人」との対面を味わうことができた。ただ、前にはあった大きな枝が折れていたのだが、その時はそれに気付かず後で訪れた「屋久杉自然館」で知った。高塚小屋でも最初は二人だけだったが、暗くなってから次々に五人が入ってきた。夜中、トイレに出ると満点の星がすぐ近く自分にかぶさってくるように感じられた。



翌朝暗がりの中、再度縄文杉に戻り敬意を表してから宮之浦岳に向かった。新高塚小屋まではポツポツと人と出会ったが、小屋から先、宮之浦岳頂上まではヤクシカ以外は誰とも出会うことはなかった。小屋周辺

は、トイレが新しくなり、携帯トイレブース、バイオ栽培と思われる設備もあり、様変わりの様相であった。頂上までの道は5～6月であればヤクシマシャクナゲがさぞや見事な世界を見せるのであろうが、今はただ想像するしかなかった。しかし、その最盛期を外したことで、小屋にゆったり泊まれ、道も混雑することが無い訳であった。屋久島の山の問題は、最盛期のオーバーユースが大部分を占めるのであるから、私のように時間が自由になるものは極力ピークを避けることが望ましいだろう。考え方によるが、自分にとってもその方が有利であり、全体にも貢献できるのではないかと思う。

頂上は多くの人たちで賑わっていた。あいにく霞模様で、自分が期待していた頂上からの海を見ることはできなかった。これより淀川登山口に向かうコースは、奇岩あり、湿原あり、変化に富んでおり、宮之浦岳登頂のメインルートであると思った。透き通った淀川の流れの傍に淀川小屋があった。屋久島で最も人気のある小屋といわれるだけあって泊まりの人は多かったが、それでも13名で割と楽に泊まれた。



三日目の朝まだ暗い中、人々は宮之浦岳に向って小屋を出て行った。私たちは反対方向の淀川口に降り、そこから躊躇なく尾之間林道に入った。ここは、屋久杉伐採が盛んな頃、人々が平木を背に通った道のりであった。二三度渡渉地点があった。雨の時は絶対行ってはならないとされる鯛ノ川であるが、雨が上がった状態でも緊張を強いられた。長い道のりを経てようやく着いた蛇ノ口滝分岐に着いた。東屋で休んでいると、ヤクザルが目の前を移動していった。ここからはハイキングコースと呼ばれる道であったが、背中への痛さに悩まされ、ほうほうの態で、最終地点の尾之間温泉に到着し山の旅を終えた。

今度の屋久島行きの目的の一つ、家内の希望は本人のがんばりと天候の好転で計画したルートを歩けたことは幸いであった。屋久島問題の確認については意気込んだ割には確かなものが得られなかったのは残念だった。最盛期を外したのでオーバーユース（入山規制）、トイレ（絶対数確保、携帯トイレ導入）、山小屋（定員制）、登山道（はみ出し歩行）については実感に乏しかった。また、ガイド制度やアクセス道路についてはいずれも利用することが無かったので、確かめる対象外だった。自然保護委員会がご苦労された「屋久島への提言」であったが、切実な実感を得られなかったのは、リアルタイムで関わっていないための限界だろうと思う。ただ、自分で歩いてみて、今度の自分の行動パターン（閑散期、ゆったり日程）は一つの行き方でないかという思いは強く感じた。ともあれ、13年ぶりの屋久島であったが、初めてじっくり対することができ、素晴らしい魅力を改めて感じさせてくれた。

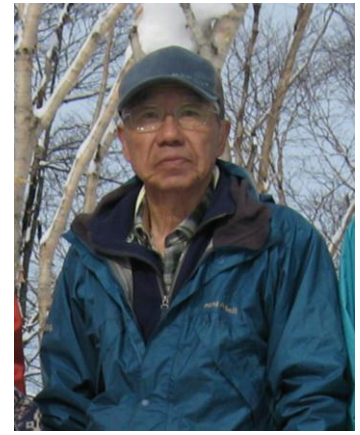
山以外の経験として訪れた所を以下に記します。

屋久島環境文化村センター、平内海中温泉（一泊）、大川の滝、尾之間温泉（入浴）、千尋の滝、屋久杉自然館、屋久島自然遺産センター、志戸子ガジュマル公園、民宿おふくろ（登山前後泊）、益救神社、屋久島町歴史民俗資料館、ウィルソン株実物大模型

（金尾誠一 記）

追悼 谷村正則副支部長

富山支部副支部長 谷村正則氏におかれましては、平成24年6月8日7時16分逝去されました。谷村さんは平成8年日本山岳会に入会され、平成14年度から富山支部監事、平成20年度からは副支部長を務められ、支部の発展に貢献されました。特に、平成17年の日本山岳会創立100周年記念 富山支部ギャジ・カン峰登山隊では登攀隊長として、登頂成功に導かれました。谷村さんのご功績に感謝しますとともに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



H24.1.22 月例山行・大品山にて

「弔辞」

弔辞

深い悲しみの中で今は亡き谷村さんの御霊前に謹んでお別れの言葉を申し上げます。

日本山岳会富山支部 副支部長 谷村正則さん、長い間ご指導をいただき誠にありがとうございました。

谷村さんは平成8年5月、木戸支部長と藤平正夫氏の紹介で日本山岳会に入会されました。当時59歳で県立富山工業高校教諭のかたわら山岳部の顧問を務められ、長年雷鳥生息調査にも参加、ネパールヒマラヤの高峰にも登頂した経験をもつベテラン登山家でした。入会後も還暦記念のアイランドピーク、さらにメラピークなど六千メートル峰にあいついで登頂を果たすなど、当時の支部会員に大きな刺激を与えられました。またナチュラルリストや山岳ガイドの活動も続けられ、一方で写真好きの会員といっしょに毎年のように山岳写真展に自慢の作品を出品されました。谷村さんの魅力は何と言ってもユーモアたっぷりの口調や駄洒落の連発など、一緒に行動する会員をいつも楽しませていましたね。また会報に寄せた文章を読んでも谷村さんの茶目つぶりが伝わってきます。

日本山岳会創立百周年記念としてネパールのギャジ・カン峰7,038メートルに富山支部から登山隊を派遣したのは平成17年のことでした。木戸隊長以下九名のメンバーで挑み、見事登頂に成功したのも、ネパールは8回目という谷村さんが登攀隊長としての力を十二分に発揮されたからでしょう。

平成20年4月、木戸支部長が退任し私と交代した際に、谷村さんには平成14年以来務められた監事から副支部長に就任いただきました。以来4年あまりにわたって富山支部を盛り立て多くの山行や行事にも参加されました。特に山岳講演会での名司会ぶりは今も目に浮かぶようです。昨年春、突然病魔に襲われ、それを余り知られないようにしばらく支部活動から退いておられましたが、10月の寺地山山行に病み上がりながら元気に参加され、その後も忘年会や新年山行にも参加されて、谷村節が復活したと喜びました。

最後の山行となったのは3月初め、地元天湖森から大乘悟山・笹津山とかんじきで歩いた時です。動物の足跡や神通峡の景観などを説明しながら自分の裏庭のように元気に終始先導されました。4月の支部総会にも顔を出されたもののその後再入院。一ヶ月くらいであっけなくお別れすることになろうとは誰も夢にも思いませんでした。今となっては、もっといろいろお話を聞いておけばよかったと後悔しきりです。山と酒をこよなく愛した谷村さん。もっともつと山に出掛けて、好きな写真も撮りたかったことでしょう。もうあの駄洒落を聞かせて貰うことはなくなりました。

私たち富山支部では、谷村さんの示された登山に対する厳しい信念を忘れず、これからも安全登山と富山支部の発展を目指して努力いたしますので、どうか見守っていて下さい。

谷村さん、どうぞ安らかにお休みください。さようなら。

平成24年6月10日

公益社団法人日本山岳会富山支部 支部長 山田信明

ご案内

各行事には会員以外の方の参加も歓迎いたします。お誘いあわせの上参加されますようお願いいたします。

内容	月日	場所など	備考
ミニ講演と懇親会	8月8日(水) 17時よりミニ講演	Cic 三階 とやま市民交流館 学習室4	【講演】「棟方志功と立山について」 五十嶋一晃氏(日本山岳会会員) 【懇親会】リコ・モンテ 会費4,000円 【申込】7/25(水)事務局まで 電話090-2036-5853または 076-438-2716
例会山行	9月21(金)～ 9月23(日)	早池峰、姫神山	【申込】8/25(土)本郷委員まで 電話090-1641-9702 *実施月日が変更となりました。
第28回全国支部懇談会(千葉支部)	10月20(土)～ 10月21(日)	(1日目) 13:00 集合、国民宿舎 サンライズ九十九里 14:30 講演 16:00 アトラクション 18:00 懇親会 (2日目) 九十九里散策または 笹森観音ハイキング	【参加費】17,000円 【申込】7/25(水)事務局まで 支部一括で千葉支部へ申込 (7/31まで)

訃報

元会員の相澤増平さんが H24.6.21 死去されました。
謹んでお悔やみ申し上げます。

(編集後記)

今回から編集委員会の顔ぶれが替りまして、慣れない編集作業で皆様にご迷惑をお掛けしましたこと、お詫びいたします。
何とか90号の発刊にこぎつけました。委員会の仲間と投稿者にお礼申し上げます。
(川田)

公益社団法人日本山岳会 富山支部会報 第90号

発行者：山田信明

編集者：川田邦夫

事務局 〒931-8451 富山市銀嶺町10-16 金尾誠一方

電話 076-438-2716 , 090-2036-5853

Eメール s-kanao@pf.ctt.ne.jp